『落窪物語』結婚三日目の夜の一考察

鹿野谷有希

一　はじめに

『落窪物語』において、姫君と道頼の結婚三日目の夜に、土砂降りの中を道頼が姫君のもとを訪れる場面は、重要だといえる。なぜ、この場面は重要なのだろうか。史的な観点からいえば、この場面を含めた姫君と道頼の三日間の結婚の様子が、当時の婚姻儀礼を知る上での貴重な資料となるためである。では、物語の流れの観点からいうとどうか。結婚三日目の夜は、土砂降りになったり、姫君が住む屋敷に向かう途中で雑色どもに盗人の嫌疑をかけられるなど、道頼が姫君のもとを訪れるのに困難な状況であった。これは、徐々に関係が深まってきた二人に訪れた、初めての危機である。この危機を回避したという点で、姫君と道頼の心が強固に結びついた最初と位置付けられるのである。(1)

さて、土砂降りの中、なんとか姫君の住む屋敷に到着した道頼は、姫君と対面し、二人で短連歌を詠み合う。

何ごとを思へるさまの袖ならむ（道頼）
身を知る雨の雫なるべし（姫君）　（巻一、上六九頁）

「何を思ってあなたの袖は濡れているのですか（なぜ、あなたは泣いているのですか）」という道頼の問いに対し、姫君は「身を知る雨の雫」によるものだと答えている。なお、『落窪物語』における短連歌の役割に関する説明は、別稿に譲りたい。(2)

この短連歌が詠まれたときに姫君が泣いていたかどうかは不明だが、少なくとも、道頼が姫君の前に現れるまでは、姫君は泣きながら臥していた。実は姫君が泣いていた理由に対して、道頼と語り手とではまったく異なる考えを持っているのである。この考えの相違が何を意味しているのか、特に姫君の心情に注目しながら、考察してみたい。

二　姫君が泣く理由

それでは、姫君が泣いている理由を道頼と語り手がどう考えていたか、詳しく見ていこう。まずは、当該場面の本文を抜粋してみたい。

女君は、今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで、おほかた聞こえ出でば、いかに北の方のたまはむ、世の中のすべて憂きこと思

ひ乱れて、うち泣きて臥し給へり。あこき、思ひ設けける効なげに思ひて、御前に寄り臥したれば、ふと起きて、「など、御格子の鳴る」とて寄りたれば、「上げよ」とのたまふ声に驚きて引き上げたれば、入りおはしたるさま、しほるばかりなり。徒歩よりおはしたなめりと思ふに、めでたくあはれなること二つなくて、「いかで、かくは濡れさせ給へるぞ」と聞こゆれば、「惟成が勘当重しとわびつるが苦しさに、括りを脛に上げて来つるに、倒れて、土つきにたり」とて脱ぎ給へば、女君の御衣を取りて着せ奉りて、「干し侍らむ」と聞こゆれば、脱ぎ給ひつ。女の臥し給へる所に寄り給ひて、「かくばかりあはれにて来たりとて、ふと掻き抱き給はばこそあらめ」とて掻い探り給ふに、[1]袖の少し濡れたるを、男君、来ざりつるを思ひけるも、あはれにて、

何ごとを思へるさまの袖ならむ

とのたまへば、女君、

身を知る雨の雫なるべし

とのたまへば、「[2]今宵は、身を知るならば、いとかばかりにこそ」とて臥し給ひぬ。(巻一、上六八～六九頁)

姫君と道頼結婚三日目の夜、道頼は激しい雨のせいで、姫君のもとへ向かうことを躊躇っていた。しかし、帯刀のもとに来たあこきからの手紙を読んで、今晩が結婚三日目の夜だと再認識した道頼は、帯刀とともに徒歩で姫君のもとへ向かうことを決心する。その道中、盗人に間違えられ、汚物の中に座らされるという災難にあうものの、なんとか姫君のもとに到着する。これは、やっとの思いで姫君のもとに到着した道頼が、姫君と対面し、和歌を詠み合う場面である。

ここで詠まれている和歌は、道頼が前句の五七五を詠みかけ、姫君が付句の七七を答える形式の、短連歌になっている。前句・付句のどちらにも、掛詞や縁語は見当たらない。姫君の付句にある「身を知る雨」であるが、この表現は在原業平の和歌

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

(『伊勢物語』一〇七段、『古今集』恋四)

の引用だと考えられる。当該場面より少し前、結婚三日目の激しい雨を姫君とあこきが嘆く場面で姫君が呟いた「降りぞまされる」(巻一、上六五頁)が根拠である。

ところで、「かずかずに……」が詠まれている『伊勢物語』一〇七段とは、どのような物語なのだろうか。次に本文を記してみたい。

むかし、あてなる男ありけり。その男のもとなりける人を、内記にありける藤原の敏行といふ人よばひけり。されど若ければ、文もをさをさしからず、ことばもいひしらず、いはむや歌はよまざりければ、かのあるじなる人、案をかきて、書かせてやりけり。めでまどひにけり。……男、文おこせたり。得てのちのことなりけり。「雨のふりぬべきになむ見わづらひはべる。身さいはひあらば、この雨はふらじ」といへりければ、例の男、女にかはりてよみてやらす。

かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

とよみてやれりければ、みのもかさも取りあへで、しとどにぬれてまどひ来にけり。

身分の高い男のもとにいる若い女に、藤原敏行という男が求愛する話である。「かずかずに……」は、今にも雨が降り出しそうなので、女のもとに行こうかどうか迷っているという、敏行からの手紙を読んだ身分の高い男が、女に代わって詠んだ和歌である。この和歌を見た敏行は、雨の中をあわてて女のもとへ向かったのだった。

この『伊勢物語』一〇七段を念頭に置きつつ、道頼が姫君の泣いている理由をどのように思ったか、考えてみよう。姫君の付句の直後に道頼は、「今宵は、身を知るならば、いとかばかりにこそ」（傍線部2）と述べている。この箇所を訳すと、「今夜は、もし自分（姫君）が私（道頼）に愛されているかどうかを知るというならば、私のこのような行動（激しい雨の中をやってきたこと）から分かるでしょう」となろう。付句中の「身を知る雨」を、業平の和歌からの引用だと考え、「自分（道頼）に愛されているかいないかを知る雨」のように受け取ったと考えられる。また、「袖の少し濡れたるを、男君、来ざりつるを思ひけるも、あはれにて」（傍線部1）から、道頼は、自分が来ないことを悲しんで姫君が泣いていたのだ、と思っていたことが分かるのである。

それでは、語り手は姫君が泣いている理由を、どのように考えているのだろうか。ここで、先ほどの本文の波線部を見てほしい。「女君は、今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで、おほかた聞こえ出でば、いかに北の方のたまはむ、世の中のすべて憂きこと思ひ乱れて、うち泣きて臥し給へり。」と述べている。つまり、道頼が来ないことをつらいと思って泣いているのではなく、道頼との恋愛が北の方に漏れてしまったら、どんなに北の方に叱られるであろう、そのことがつらいと思って泣いているのだと、考えているのである。

このように道頼と語り手は、姫君が泣いている理由に対してまったく異なる考えを持っている。この相違について考察するまえに、姫君の心情の推移を物語冒頭から追っていき、姫君が泣いている理由に迫ってみたい。

三　姫君の発言・和歌

姫君の心情の推移を追うための材料として、姫君の発言・和歌を用いることとする。地の文では語り手の推測や曲解が入っている可能性もあるが、姫君自身が発した言葉・和歌は、姫君の心情をもっとも反映していると考えられるからである（もちろん、常に本音を語っているとは限らないけれども）。物語冒頭から当該場面までの姫君の発言・和歌はさほど多くはないため、次にすべてを抜き出してみよう。なお、和歌は手紙に書かれたものも含まれている。

①日に添へてうさのみまさる世の中に心づくしの身をいかにせむ（巻一、上一六頁）

②世の中にいかであらじと思へどもかなはぬものは憂き身なりけり（巻一、上一八頁）

③（三の君に召されていることは、本意ではなく悲しいと泣いているあこきに対して）「何か。同じ所に住まむ限りは、同じこ

とと見てむ。衣などの見苦しかりつるに、なかなかうれしとなむ見る」(巻一、上一九頁)

④「母君、我を引かへ給へ。いとわびし」(巻一、上二一頁)

⑤(④の直後に)我につゆあはれをかけば立ち返りともにを消えよ憂き離れなむ(巻一、上二二頁)

⑥(あこきから道頼の手紙を渡されて)「何しに。上も、聞い給ひては、『よし』とはのたまひてむや」(巻一、上二四頁)

⑦(道頼からの手紙を読んで姫君が)「絵や聞こえつる」とのたまへば、(あこき)「帯刀がもとに、しかしか言ひて侍りつるを、御覧じつけけるに侍るめり」と言へば、(姫君)「うたて、心なと見えられたるやうにこそ。人に知られぬ人は、有心なるこそよけれ」とて……(巻一、上三四頁)

⑧(姫君のそばにいると言うあこきに対して)「なほ、はや。恐ろしさは目馴れたれば」(巻一、上三八頁)

⑨なべて世の憂くなる時は身隠さむ巌の中の住みか求めて(巻一、上三九頁)

⑩(道頼からの詠みかけ「君がかく泣き明かすだに悲しきにいと恨めしき鳥の声かな」に対して)人心憂きには鳥にたぐへつつ泣くよりほかの声は聞かせじ(巻一、上四四頁)

⑪(「私が少将を姫君のもとへ手引きしたのだとお思いなのでしょう」と拗ねるあこきに対して姫君が)「そこに知りたらむとも思はず。いとあさましう、思ひもかけぬことなれば、いと心憂く思ふうちに、いといみじげなる袴、ありさまにて見えぬることぞ、いと言はむ方なくわびしけれ。故上おはせましかば、何ごとにつけても、かく憂き目見せましや」とて、いみじう泣き給へば……(姫君)「それこそは、まして。かく異やうにあらむ人を見て、心とまりて思ふ人はありなむや。ものの聞こえあらば、北の方、いかにのたまはむ。『我が言はざらむ人のことをだにしたらば、ここにも置いたらじ』とのたまひしものを」(巻一、上四六～四七頁)

⑫(道頼の二度目の訪問に際し)「心地悪し」とて、ただ臥しに臥しぬ。(巻一、上五一頁)

⑬(道頼から届いた和歌「よそにてはなほわが恋をます鏡添へる影とはいかでならまし」の返事として)身を去らぬ影と見えては真澄鏡はかなくうつることぞ悲しき(巻一、上五九頁)

⑭(あこきに餅を見せられて)「餅は、何の料に請ひつるぞ」(巻一、上六〇頁)

⑮(道頼からの手紙の返事として)世にふるをうき身と思ふわが袖の濡れ始めける宵の雨かな(巻一、上六三頁)

⑯(道頼と姫君の結婚三日目の夜、大雨が降るのを嘆いて、あこきが)「愛敬なの雨や」と腹立てば、君、恥づかしけれど、「など、かくは言ふぞ」とのたまへば、(あこき)「なほ、よろしう降れかし。折憎くもおぼえ侍るかな」と言へば、(姫君)「降りぞまされる」と、忍びやかに言はれてぞ、いかに思ふらむと恥づかしうて(巻一、上六五頁)

⑰(道頼からの詠みかけ「何ごとを思へるさまの袖ならむ」に対

して）身を知る雨の雫なるべし（巻一、上六九頁）

道頼の存在を知るまで（⑤まで）は、北の方に虐められている境遇を嘆くことが多かった。独詠歌すべてに「憂し」が使われていることが、特徴的である。道頼の初めての手紙をあこきから渡されたとき、姫君は北の方を気にし、手紙、そして道頼には、まったく関心を示していない（⑥）。物語はここから、道頼の求婚を一切無視する姫君の様子を描いていく。姫君から一切返事が無いことに業を煮やした道頼は、中納言一家が石山詣でに出かけ、屋敷に姫君とあこきが残る日があることを知り、姫君のもとに忍び込む。姫君と一夜を共にした道頼は、姫君に歌を詠みかけ、今度は返事をするように促す。それに対し姫君は、初めて返事をする（⑩）。

道頼と一夜を共にして以来、徐々に姫君の態度に変化が現れる。当初は「こんな風変りな私を見て、思いをかけてくれる人などいるはずがない」（⑪）と語り、道頼の二度目の訪問に際しても「気分が悪い」（⑫）と言って、自ら身なりを整えようとはしなかった。しかしながら、二度目の逢瀬の後に届いた道頼からの和歌には返歌をし（⑬）、その後も道頼に対して歌を詠むようになる（⑮、⑰）。さらに、結婚三日目の夜に大雨が降るのをあこきと嘆く場面では、「降りぞまされる」と言っている（⑯）。この「降りぞまされる」は、先掲の業平の和歌「かずかずに……」からの引用であり、姫君は雨の中を道頼に来てほしいと思っていると言えそうである。また、「降りぞまされる」を思わず口に出してしまって、あこきがどう思うか気にして恥ずかしく思っていることからも、姫君が少なからず道頼のことを想っていることを、自覚しつつあると考えられるのである。

次に、和歌に注目してみよう。先ほども述べたとおり、姫君は道頼の存在を知るまでは、「憂し」を使って北の方に虐められている自分の境遇を嘆く和歌ばかりを独詠していた（①、②、⑤）。道頼が姫君のもとへ忍び込む直前も、同様の和歌を詠んでいる（⑨）。道頼と結婚初日・二日目の夜を過ごした、その翌朝に道頼から詠みかけられた（ただし、二日目の場合は文による）和歌に対しては、⑩では「泣く」「鳥」「声」を、⑬では「ます鏡」「影」を呼応させている。なお⑬の和歌に関して、新編日本古典文学全集では、道頼からの贈歌と同様に「ます鏡」の「ます」に「（恋心が）増す」を掛けて、「あなたは私の身から離れない影と思われて、私の恋心は増しますけれども、真澄鏡というものは人の姿をはかなく映すものであり、あなたの心もほかの女性にはかなく移っていくのが悲しいことですよ」[3]と、姫君が道頼に恋心を抱いている前提で、その恋心を前面に押し出すような現代語訳がされている。⑬の和歌が詠まれた段階で、姫君が道頼に対し、これほどまでに強い恋心を表明するとは考えにくい。例えば、「私の身を離れない影と見られるのでは、鏡に影が写るように、あなたのお心もはかなく移るのだと思って悲しくなります」[4]などと訳すのが穏当である。しかしながら、文に書かれた和歌に対して、一切返歌せずに無視をしてきた姫君が初めて返歌したことから、ある程度の恋心を抱いていると考えられるだろう。そして三日目の夜、大雨のために姫君のもとへ行けそうにない

という道頼からの手紙に対して、和歌のみを返したものが⑮である。内容は、この世に生きることをつらいと思っている姫君の袖が、雨が降って道頼が来ない今夜、涙で初めて濡れた、というもので、道頼が来ないから涙で袖が濡れた、と解釈できる。この和歌を踏まえると、次に道頼と詠み合った短連歌の付句「身を知る雨の雫なるべし」も、「私が愛されているかいないかを知っている雨の雫、すなわち、涙で濡れたのでしょう[5]」と、解釈できそうである。

以上のように、姫君の発言・和歌を見てくると、姫君が道頼を慕う気持ちが微かながらも感じられ、道頼が雨の中を姫君のもとへ向かわなかったことが、姫君が泣いている理由に多少なりとも影響していそうだといえる。少なくとも、語り手が「今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで」と断言していることには、違和感がある。

四　語り手に断言させる理由

それでは、なぜ作者は語り手に「今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで」と断言させたのだろうか。また、このような記述をすることによって、物語にどのような影響を及ぼすのであろうか。なお、この節では「語り手」という言葉を何度も用いることになるが、『落窪物語』の語り手について、三谷邦明氏は「特に注意すべきは、「語り手」としての阿漕で、多くの落窪物語の情報・出来事は彼女を通じて獲得したという設定で、落窪物語は叙述されているのである[6]」と述べ、吉岡曠氏は「落窪物語の語り手は、物語世界の同時代者として設定されているという点で、必ずしも物語世界の外部的存在とは言いがたい。一方、物語世界に具体的な定位置を占めていないという点で、まったく内部的存在であるとも言いがたい。いわば内部と外部との中間に位置していると言ってよい[7]」と述べている。本稿では、「語り手が何者か」ではなく、「なぜ作者はそのように語り手に語らせたのか」を論考していくため、語り手が何者なのかを詳しく考察することは控えたい。

さて、作者がなぜ語り手に「今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで」と断言させたのか、考えていこう。結婚三日目の夜に、道頼が大雨のために来ないことを姫君とあこきが嘆く場面で、姫君は「降りぞまされる」と呟いている。また、その後道頼が大雨の中をやってきて、姫君と道頼が対面して短連歌を詠み合う場面では、姫君は「身を知る雨」を用いて付句を詠んでいる。第二節で述べたように、「降りぞまされる」と「身を知る雨」はともに業平の和歌「かずかずに思ひ思はず問ひがたみ身をしる雨はふりぞまされる」から引用されたものなので、この二つの語句は同じ意味を表しているといえる。しかしながら、これらの言葉の発し方は異なっている。「降りぞまされる」は「忍びやかに言はれて」、つまり、密かに思わず呟いてしまっており、また、それをあこきに聞かれてしまって「（あこきガ）いかに思ふらむと恥づかしう」思っている。一方で「身を知る雨」は、短連歌の付句として、道頼に対して自分の意思で「身を知る雨の雫なるべし」と詠んでいる。思わず呟いてしまって恥ずかしく思った言葉と、自分の意思で発言した言葉。この対照的ともいえる状態で発せられた二つの言葉が、語り手の「女君は、今宵来

ぬをつらしと思ふにはあらで……」の一文を挟んで対峙しているのである。この並びは、姫君の人物像を複雑なものにしている。どのように複雑にしているのだろうか。

その前にまず、読者について考えてみたい。もし「女君は、今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで……」の一文がなかったなら、読者は姫君が泣いている理由をどのように考えるであろうか。おそらく大半の読者が、道頼が来なくてつらいから、と考えるであろう。それは、多くの読者が『落窪物語』の当該場面までを、姫君と道頼の恋愛の展開に注目しながら読むためである。特に、屋敷に姫君とあこきが残り、姫君のもとに道頼が忍び込む結婚一日目の場面から、結婚三日目の当該場面までは、中納言一家の様子が一切触れられておらず、二人の恋愛に注目しやすくなっている。中でも読者が夢中になるのが、結婚三日目の当該場面だろう。「降りぞまされる」の呟きを見た読者は、当然、あこきと同様に姫君もこの大雨を、つまりは道頼が来ないことを嘆いていると思いながら、物語を読み進めるのである。「女君は、今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで……」の一文がなかったならば、読者の姫君像は「降りぞまされる」という呟きを境に、北の方に虐められている境遇を嘆く姫君から、道頼との恋に生きる姫君へと、移行していくであろう。

一方で、語り手は当該場面まで、この物語をどのように語っているのだろうか。語り手は読者のように二人の恋愛に肩入れすることなく、淡々と物語を語っているように思われる。「今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで、おほかた聞こえ出でば、いかに北の方のたまはむ、世の中のすべて憂きこと思ひ乱れて」の発言から考えると、むしろ、姫君と北の方の関係性のほうに注目しているようなのである。他方読者は、姫君と道頼の関係性（恋愛）のほうに注目して物語を読み進めていく。両者の物語に対する着目点は、微妙に異なっているように思われる。

道頼が来ないことがつらくて泣いていると思っている読者は、「女君は、今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで」で不意を打たれ、「おほかた聞こえ出でば、いかに北の方のたまはむ、世の中のすべて憂きこと思ひ乱れて、うち泣きて臥し給へり」で、姫君が北の方に虐められることが怖くて泣いている可能性があることに気づく。先ほど、「女君は、今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで……」の一文がなかったならば、読者の姫君像は、北の方に虐められている境遇を嘆く姫君から、道頼との恋に生きる姫君へ移行するであろう、と述べたが、このような単純な移行を、「今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで……」が阻んでいるのである。

思い起こしてみれば姫君は、第三節に掲げた⑥で「上も、（道頼トノ文通ヲ）聞い給ひては、『よし』とはのたまひてむや」と言い、また⑪でも「ものの聞こえあらば、北の方、いかにのたまはむ。『我が言はざらむ人のことをだにしたらば、ここにも置いたらじ』とのたまひしものを」と言っているように、北の方を怖れ、道頼への関心を封じ込めようとしていた。

姫君と北の方の関係性のほうに注目している語り手は、結婚三日目の夜も姫君は相変わらず北の方を怖れており、道頼への思いは封

じ込めている、と語る。姫君と道頼の関係性（恋愛）のほうに注目している読者は、「降りぞまされる」という呟きを重視し、北の方への怖れを克服して道頼への思いを解き放ちつつあるように考えていたが、語り手の発言はそれを否定するのである。読者の考えが間違っているのだろうか。

先ほど、業平の和歌から引用された「降りぞまされる」と「身を知る雨」が、対照的ともいえる状態で発せられ、語り手の「女君は、今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで……」の一文を挟んで対峙しており、この並びが姫君の人物像を複雑なものにしていると述べた。姫君の人物像を複雑にしているとはどういうことなのか、見ていこう。

「降りぞまされる」を思わず呟いてしまったことによって、姫君は道頼を慕う気持ちがあることを自覚したのであろう。「身を知る雨の雫なるべし」は、そのような気持ちを自覚した上での発言だったと思われる。恋愛を知らなかった姫君が道頼と出逢い、無自覚の中で道頼を慕う気持ちが徐々に育まれていく。この過程を経て、無自覚だった気持ち――大雨の中を道頼に来てほしい――に気づき、さらに、その気持ちを道頼に吐露する。姫君は「降りぞまされる」と呟く前に、雨で姫君のもとへ向かえないという道頼からの手紙に対して「世にふるをうき身と思ふわが袖の濡れ始めける宵の雨かな」（第三節の⑮）と返している。この歌は、「身を知る雨」と同様の意味――道頼が大雨の中を来てくれないことを悲しく思う――であるが、それぞれを詠んだときの姫君の心境は異なっている。常に本音を和歌に託すとは限らないため、「世にふるを……」歌を詠んだとき、それがどの程度姫君の本音だったかは分からない。しかし少なくとも、道頼を慕う気持ちを自覚した上で口にする「身を知る雨の雫なるべし」の方が、道頼が大雨の中を来てくれないことを本当に悲しく思っていたといえるだろう。しかも、道頼が詠みかけたのは短連歌の前句であり、姫君は即座に付句を詠まなくてはならなかった。その状況から見ても、「身を知る雨の雫なるべし」が思わず出てしまった本音である可能性が高いのである。

「世にふるを……」歌と「身を知る雨の雫なるべし」について、実は「憂し」からも姫君の感情を読み取ることができる。ここで、姫君と「憂し」の関係について触れておこう。姫君という人物を表す上で欠かせない言葉が「憂し」である。第三節で述べたように、北の方に虐められている境遇を「憂し」を使った独詠歌で嘆き、また、「人心憂きには鳥にたぐへつつ泣くよりほかの声は聞かせじ」（第三節の⑩）のように、道頼への返歌にも「憂し」を使う、まさに「憂し」の女性といえる。そんな姫君が、「世にふるを……」では「憂し（うき）」を使っているのにも関わらず、「身を知る雨の雫なるべし」では「憂し」を使っていない。「身を知る雨の雫なるべし」で「憂し」を使わなかった理由として、道頼が来てくれたから、ということが挙げられる。道頼が来てくれた嬉しさのため、付句を詠んだ瞬間は、「憂し」の感情がなかったのかもしれない。言いかえると、このときは北の方のことが頭になかった、となるのである。常に北の方を意識し、「世にふるを……」を詠んだときにも北の方

のことが頭にあった姫君が、このときは北の方のことが頭になかったとしたら。それは、北の方を怖れ、道頼を慕う気持ちを封じ込めようとしていた姫君の、恋愛面での成長だといえるのではないだろうか。

だとすれば、「女君は、今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで……」という語り手の発言が間違っていたのだろうか。姫君は北の方への怖れを克服し、北の方の支配から脱して、道頼との恋に生きる決心をしたのだろうか。実は、そうでもないのである。姫君は、その後も北の方を怒らせないように気を遣いつづける。道頼への思慕を肯定しながら、北の方にも従いつづけるのである。この二つは本来矛盾しているのだが、姫君の中では不思議なことに共存しているのだ。ここに、複雑で魅力的な姫君像が立ち現れてくるのである。

『落窪物語』の中で、虐め役という個性がある北の方や活き活きとした動きのある道頼・あこき・帯刀に比べると、姫君は一見地味でつまらなく、北の方に虐められる境遇を嘆いてばかりで、どこか単調な人物である。しかしながら物語を深く読みこんでみると、姫君の成長――特に、恋愛面においての――に気づくことができる。この姫君の成長が、姫君像を豊かなものにし、複雑にしているのである。

五　おわりに

最後に、姫君が泣いている理由を、道頼・語り手がそれぞれどのように考えているか、改めてまとめておこう。

まず道頼の場合である。姫君を愛する道頼は、大雨の中を様々な困難に遭いながらも姫君のもとへやって来た得意気な気持ちから、「今宵は、身を知るならば、いとかばかりにこそ」、つまり、「自分（道頼）が来ないと思って泣いていた」と考えている。一方で語り手は、「おほかた聞こえ出でば、いかに北の方のたまはむ、世の中のすべて憂きこと思ひ乱れて」泣いていると考え、断言している。道頼・語り手の考え方の相違、とりわけ、語り手が「今宵来ぬをつらしと思ふにはあらで」と断言することは、姫君像を複雑なものにし、より人間らしく描く上で、重要だといえる。『落窪物語』において、姫君と道頼の結婚三日目の夜に、土砂降りの中を道頼が姫君のもとを訪れる場面は、史的な観点や物語の流れの観点の上で重要だと、本稿の冒頭で述べた。史的な観点からの重要性、物語の流れの観点からの重要性に続き、人物の造形という面での重要性を導くことができたと思う。数多の重要性を含んだ当該場面が『落窪物語』の核としてどっしりと君臨しているからこそ、千年以上の時を経ても、『落窪物語』という姿を現在に遺すことができているのだろう。

注1　拙稿「『落窪物語』における短連歌」（『成蹊國文』四十五号、二〇一二年三月）九三頁。
2　注1論文、九二～九六頁。
3　『新編日本古典文学全集　落窪物語　堤中納言物語』（三谷栄一、三谷邦明、稲賀敬二校注・訳、小学館、二〇〇〇年九月）五六頁。

4　『新版　落窪物語　上　現代語訳付き』の現代語訳（二八二～二八三頁）を引用した。
5　注4書、二九四頁。
6　三谷邦明「源氏物語と語り手たち―物語文学と被差別あるいは源氏物語における〈語り〉の文学史的位相」（『日本文学史を読む』第二巻、有精堂編集部編、有精堂出版、一九九一年五月）一五六頁。
7　吉岡曠「落窪物語の語り手」（『論叢王朝文学』、上村悦子編、笠間書院、一九七八年一二月）三六四頁。

※『落窪物語』の引用は、『新版　落窪物語　上　現代語訳付き』（室城秀之訳注、角川文庫、二〇〇四年）に拠り、その頁数を記した。また『伊勢物語』の引用は、『新編日本古典文学全集　竹取物語　伊勢物語　大和物語　平中物語』（小学館、一九九四年）に拠った。

（しかのや・ゆうき　本学文学部助手）